国木田独歩の佐伯での生活（一）

山内　武麒
（賛助会員・佐伯市城下東町）

（一）

明治二十六年九月三十日に佐伯に来て、翌二十七年の八月一日に佐伯から去った国木田独歩の、佐伯での生活ぶりについて、特に自然讃美者であった独歩の佐伯の自然との結びつきについて記してみたいと思う。

それには独歩の日記である『欺かざるの記』の中の特に佐伯在住の期間を丹念に読んで調べるのが最もよいと考える。『欺かざるの記』の原本の表紙の写真を見ると、『欺かざるの記』の表題の横に「事実、思想、感情」と添書してある。その日その日にあったことは無論のこと、その日考えたこと、感じたこと、想像したこと、心の中に湧き出た感情を少しもはばかることなく赤裸々に書きしるした告白の記である。『欺かざるの記』と名付けた独歩は「赤條々の大感情」に立脚したものである。と言っている。言換えれば私心をすてゝ自分自身を見つめて叙述したものであろう。

独歩は明治の文豪としてその名声を博したが、その文学への素地、即ち作品に通して流れる思想的の基底は、この佐伯での生活中に培われたものと云ってよい。独歩は自然をこよなく愛し、その美の深奥を究めようと山野を抜渉し、英国の叙情詩人ワーズワースの詩を愛誦し、佐伯の風光を讃美していた。彼はまた熱心なクリスチャンで、常に霊魂と肉体、無窮と現実の闘いに苦しみながら、深い信仰に生き誠実真摯（しんし）な生活を念じ、神に近づくことを祈っていた。独歩の佐伯での生活ぶりはこんなに真面目で美を愛したのである。

独歩は、『欺かざるの記』を主材として、雑誌『明星』に明治三十四年九月から三回に分けて連載された小品「独語」の第二部の序文に、次のように記してある。

これ彼が田舎教師として約一年間、豊後國佐伯町に滞在せし時の日記なり。則ち二十六年九月三十日より二十七年八月一日に至るまで、人の子を教へつゝも常に自ら学ぶ処あり、苦しみ悶えつゝ又自然の特殊な恩寵を得て限りなき慰藉を得たる。彼が今日までの生涯に於て尤も幸福なりし時の日記なり。

と。佐伯での一年間の生活が、生涯を通じて最も幸福であったと述懐している。

この佐伯在住の期間の生活を、『欺かざるの記』、手紙、その他の文献を参考にして記述してみることにする。

(二)

先ず初めに独歩が佐伯に鶴谷学館の教師として赴任して来たそのいきさつについて述べよう。

明治十八年七月、当時十五歳の独歩少年は山口中学校初等科の入学試験に合格し入学して寄宿舎に入った。成績は十一番であったという。当時両親は萩に住んでいたのである。ところが二十年三月に中学校学制改革があって、止むなく同校を退学した。前年この中学校を退学して上京していた級友の今井忠治からのすゝめにより、両親の承諾を得て、四月に上京した。

そして東京神田の某法律学校に通学していたが、翌二十一年五月に東京専門学校（早稲田大学の前身）の英語普通科に入り、更に英語政治科に転じた。それは故郷の父に対する思惑もあったであろうが、元来少年時代から育成されている政治熱によるものであろう。しかし、この政治科の過程は独歩の満足するものでなかった。つまり彼の性分にあわなかったのである。そして、しばしば文学科の講義を盗聴していたという。このように政治科から離れようとした大きな原因はキリスト教にある。独歩は二十二年十九歳の頃からキリスト教会に出入りして、二十四年一月、東京麹町区の一番町教会で牧師植村正久氏によって洗礼を受けた。この植村氏は牧師であったが、文学批評家で、その主宰する『日本評論』には彼のすぐれた文学観を記載してある。エマソン、カーライル、ワーズワースは独歩の思想を構成した三つの柱であるが、この三者を独歩につぎ込んだのはこの植村氏であった。

この文学的素地を植えつけられた独歩は、文学に深く興味を持ち勉強し、なお校友会雑誌や同人雑誌に投稿していた。ところが独歩は二十四年の三月に、都合によって専門学校を退学し、五月初めに両親の住んでいた山口県の柳井に帰った。帰って間もなくして徴兵検査を受けたが不合格であった。その後あちこちと旧知を訪うて廻り、十月に田布施で英学塾を開き、英語・数学・作文を教えてみたが思わしくなかった。

二十五年六月に弟収二を連れて再び上京した。収二は東京専門学校に入学したが、独歩は定まった職に就くことができず、父からの仕送りで、雑誌社などの下働きをしながら青年文学会に出席して文学に親しんでいた。

しかし彼は生活のために何かの職に就かねばならないと考え、新聞記者になろうと二十六年二月に金森通倫氏を訪ねて自由新聞社への入社を懇請した。そして漸く願いがかなって入社することができた。この頃独歩は民友社発行の『家庭雑誌』に「鉄斧生」または無記名で寄稿したが、それは彼の目的とする文学とは縁遠い家庭向きの随想文や雑録であった。彼がたゞ一つのよりどころとしていたのは文学批評雑誌『青年文学』という浪漫主義風の雑誌であったが、結局五月には廃刊を余儀なくされ、独歩の文学的前途はあんたんたるものであった。

しかも食うために入社した自由新聞社の月給は僅か月三円であった。それに四月になると社の経営難の理由で解雇を申し渡され、その間たゞ一度しか給料を貰えなかった。元来独歩は政治記者である肌合いを持たず、政治を俗事と見て、社務にあまり熱心でなかったことが原因の一つであったらしい。この頃の独歩は文学を愛し詩を求め、読書に耽り人生を真摯に生きようと考えていた。その上文学的発表機関もなく、生活は安定を失ない、やむなく英文学書の翻訳などを探してやっていたが、大した金にならず父からの送金を頼らざるを得なかった。

独歩は職を求めるため友人たちに頼んであった。八月になって友人の中桐確太郎から、福島民報社に就職の口があるが福島へ来ないかと云う報せがあった。独歩は二十四年頃から面識を得て時々出入していた新聞界の大先輩徳富猪一郎氏を訪ねて、この福島民報社の話を相談すると、徳富氏は新聞記者になりたいのなら一日も早く地方へ行くように勧めた。しかし独歩は東京から離れることが嫌いであったのか、この勧誘を断ってしまった。

ところがその月の下旬になると、郷里の父から来月から送金は一切出来ないと云って来た。八月二十八日の記に次のように書いてある。

父より書状あり、愈々免職の由申来ル、来月の学費は送り難き由、母非常の苦心の由、申来ル

われ自らの悲劇はそろそろ始まらんとする也。

嗚呼わが地上の運命、神は之れに由りて教へ給ふ。来れ如何なる運命も、われ之れに勝たん。われ爾の中に人生の真を見ん。余が信仰を験せん。

と、父専八は永年裁判所に勤務し判事補までなっていたのであるが、今月限りで定年退職になったのである。

独歩は父からの報せを受けいよいよ困って再び徳富氏を訪ねた。八月二十九日の記に、

午前徳富猪一郎氏を訪ふ。之れ職業に付き依頼する処あればなり。至急周旋の労をとる可きをだくせらる。と、ある。窮地に追い込まれた独歩を見て、蘇峰は同情し、早速職を探してやろうと約束したのである。そして九月五日の記に、

民友社に徳富氏を訪問す。大分県に教師として行く可きをすゝめらる。矢野文雄氏へ推薦状を与へらる。

と、ある。矢野文雄氏は郷里佐伯の鶴谷学館の教師の件について、佐伯の方から頼まれて探していて、徳富氏にもよい人物を周旋してくれるよう頼んでいたのである。

独歩はその翌六日に早速矢野文雄氏を訪問して教師の件について相談した。自分を斡旋(あっせん)してくれるよう頼んだのであろう。

その後矢野氏から何の連絡もないので、手紙でどうなったかと問い合わせると、十三日に返事が来て、十九日に来るようにとのことであった。

十九日　矢野文雄氏に行く。愈々大分に教師として参ることに決す。

と、いよいよ佐伯の鶴谷学館の教師の職が決まったのである。そして翌二十日に徳富氏を訪ね、報告しお礼を申上げた。

二十日　朝徳富猪一郎氏を訪ふ。警めて曰く他人と衝突する勿れ、人を凌ぐ勿れと皆な余が今度大分に行き人と交はるに当りて適切の誡なり。吾能く人と衝突すればなり、凌げばなり。

されど徳富君心配し給ふ勿れ。人と衝突せし余は今の余に非ず人を凌ぎし余は恐らく今の余にあらざる也

衝突は雅量なきの致す処、凌侮は謙遜なきの致す処、共に修養ある者の恥辱とする処なり。

徳富君、余は君が思ふよりも大なり。余は進歩する霊魂(ソール)也

と、徳富蘇峰は独歩の就職するに当り独歩の性格上の欠陥をついて強く忠告している。これに対して、独歩は自分の欠陥をつかれ、よく考え心に期するものを堅持している。

職は無く、父からの仕送りも断たれ二進も三進も出来なかった独歩は、このように徳富蘇峰の紹介と矢野文雄の推薦で佐伯の鶴谷学館の教師の職にありついたのである。

九月二十一日、友人や教会関係の人々が独歩の為めに送別会を開催してくれ、その日の晩の九時五十分新橋発の夜行列車で、友人今井忠治に見送られて東京を離れた。翌二十二日午後彦根に途中下車して、東京専門学校以来の友人である大久保余所五郎を訪ね快談し、彦根城などに案内されて見学し、その夜は同君の宅に一泊した。その翌二十三日午後大阪に出て下り汽船に乗り込み、二十四日の夕暮柳井港に到着し我家に帰った。

二十五日と二十六日は麻郷村の吉見家を初め以前世話になり、今もなお親交をつゞけている近郊の家々を訪問した。佐伯に行くことになった挨拶回りをしたのであろう。

二十七日の夜の十時、弟の収二を連れて柳井港から乗船し、二十八日朝宇品港に着き、宇品から四国の三津ケ浜行の小蒸気船に乗り換え三津ケ浜にその夜半に着いた。そして翌二十九日の午後また汽船に乗り込み、三十日の正午頃佐伯港に到着したのである。

独歩兄弟は葛港から人力車で町へ出て仲町六十八番地の富永旅人宿に止宿した。当時この宿屋の主人は富永定吉という人で、現在東京で漫画家として活躍中の、佐伯出身の富永一朗氏の祖父に当たる人であった。その宿の場所は現在のちえの井酒店のあるあたりと推察される。

かくして独歩の佐伯での生活が初まったのである。

(三)

佐伯に着いた翌日の『欺かざるの記』を見ると、「先月二十日に筆を止めしより十日を過ぎぬ。」と書き出して、九月二十日から十月一日までの記を簡単に書いてある。

この間に教師として佐伯へ行くことが決まったので、その準備や帰郷などのことで筆を取ることが出来なかったのであろう。

二十日の夜は矢野文雄氏に招ねかれて共に晩食して共に談ず。

と、ある。矢野氏は郷里佐伯の鶴谷学館の教師に自分の周旋で決まった独歩を、郷土の先輩として招待し、晩餐を共にし、佐伯の子弟の教育についてよく頼んだのであろう。

この夜のことを「独歩遺文　感想篇」の「欺かざるの記の緒言」の中に次のように記してある。

イバミノンダス、ペロピダス、メルロー、リュウクトラ、シーブス、アデン、スパルタの名をして一時わが読書社会に喧伝せしめたる小説の著書を、某赤坂なる邸宅に訪ひし一人の青年あり。明治一年九月二十日の夜の事なりき。

此名高き小説の著者其人の事はいまさら茲に説くの要なし。青年の名を佐藤武二といふ。

著者は此時すでに四十余歳、長者の風を以て青年に対し、青年は未だ二十を幾何も越えず、後進の礼を持してこれに応へぬ。此夜雨しめやかに降り屋外寂寥、談話は此長者が郷里豊後の佐伯の事に初まり、文学に及び政治に及び、長者が多事なりし過去の経歴など細かに語り、教育の事地方少年の気風の事など、彼れより之れとはてしなかりき。青年の情は火の如く燃え、長者の心は家外の雨の如くに静かに、遂に夜の十時に及びて青年は辞して帰りぬ。

と、長者は矢野文雄氏、独歩は佐藤武二と仮名してある。名高き小説とは矢野氏の著作である『経国美談』である。

二十一日の午前は外出して出発準備の買物をし、午後の四時から教会員の人達が植村牧師の宅で送別会を開いてくれた。出席者は田村三治、久保田富次郎、西森拙三、植村正久、その他一名の諸氏であった。植村氏は送別の詞として私立学校について話された。一足早く六時半に辞去して友人の今井忠治君に別れに訪ねた。今井君は病気で臥せていたが独歩が来ると無理に起き、独歩と一しょに独歩の家まで来て、とうとう新橋駅まで見送ってくれた。

九時五十分の夜汽車を以て京を発す。

と、ある。独歩はいよいよ東京から離れて一旦郷里の山

口県柳井に向って出発したのである。嘸かし後髪を引かれるような思いがしたことであろう。

途中彦根駅で下車して彦根在住の友人大久保余所五郎を訪ねている。大久保の家に着いたのは二十二日の午後であった。九州佐伯へ行くことになったので別れに寄ったのであろう。大久保は独歩を案内して彦根の旧城に登って眺望し、その晩は大いに語り合い一泊した。

この大久保余所五郎は独歩とは東京専門学校以来の盟友で、湖邦、湖州と号して歴史研究家で井伊大老の研究がある。

二十三日の朝彦根を出発して正午大阪に着き、すぐ乗船した。

そして二十四日夕刻柳井港に着き、父母の住む柳井の家に帰り着いたのである。

二十五日は麻郷村の吉見家を訪い、二十六日に河手氏を訪問し、その帰り道に有光里嬢の墓に参って弔している。

吉見家は山口県熊毛郡麻郷村の素封家で、国木田一家が以前この家に寄寓していたことがある。この縁でそれ以来親しく交際し、独歩は帰郷の度びに必ず訪問していた。九州に行くので別れの挨拶に行ったのであろう。

河手氏は大野村の資産家で、この家とも親しく交際していた。有光里嬢というのはこの河手氏の妻君の実家の娘で、以前独歩が可愛がっていた少女である。

二十七日早朝家に帰り、一日家に居て出発の準備をし、夕方から近所の親しい人を二三人招いて送別の夕食を共にした。

夜十時、送られて柳井港に出て半夜乗船、二十八日朝宇品港に着す。其日は終日宇品港に止まりて三津ケ浜行の汽船を待つ。午後七時乗船、夜半三津ケ浜着。

二十九日午後乗船、三十日正午佐伯着。

と、ある。山口県の柳井から佐伯まで来るのに丸三日あまりかゝっている。汽車が通じていなかったこの頃、中国の柳井から九州の佐伯に来るには、四国を経由して三度も船を乗りかえて三日も四日もかゝったのである。

佐伯の葛港に上陸した独歩兄弟は人力車で町に出て、仲町の富永旅館に投宿した。

そしてこの着いた日の午後、独歩は早速中根祚胤氏を訪問して着任の挨拶をした。中根氏は佐伯の長老で、当時百九銀行の頭取をしていて鶴谷学館の経営に参与して

いた。矢野文雄氏から佐伯に着いたら真っ先に中根氏を訪問して挨拶するように指示されていたのであろう。この中根氏は独歩の小説「鹿狩」に登場する。

今日午前山名、野村、高橋等四人来訪。午後収二と共に近郊を漫歩し高きに上りて遠望すれば佐伯市眼底にあつまる。

夜少年諸子来訪、其前山中盛大郎氏を訪ふ。

と、ある。今日即ち十月一日のことを記してある。午前に山名、野村、高橋等四人が来訪したとある。新任の教師に挨拶に来たのであろう。山名は名を驥といい、前年の二十五年の七月に、当時大分県下に唯一校しかなかった大分尋常中学校を卒業していた。当時佐伯では唯一人の中学校卒業生であった。また野村は一也と言い、当時、大分尋常中学校に在学中であった。山名は小学校教員となり永年校長を勤め、野村は後に佐伯町長となった。

午後は弟の収二を連れて近郊を散歩し、高い所に登って遠望している。城山へ登ったのであろう。

夜は鶴谷学館の生徒達が来訪している。新任教師に挨拶に来たのであろう。その前に山中盛太郎氏を訪問して挨拶している。山中氏は当時百九銀行の取締役をしていて鶴谷学館の経営に参与していた。この人は後に佐伯町長を勤めた。

この日の記には書いてないが、この一日に独歩は友人の中桐確太郎に当てゝ手紙を出している。

無事に佐伯に着いたことを報らせ、次に

自由の児は半ば束縛の絆にかゝりぬ。希望の児は半ば失望の鬼に捕はれぬ。平和の児は半ば煩悶の蛇に呑まれぬ。

と、ある。今まで自由奔放な身であったものが勤務にしばられる身となり、不安な気持にかられて悶えている心情を訴えている。そして自己を反省して

自ら修養の足らざるを悔むこと幾度ぞ。頭上に天光依然たり。されど顧みて心裡の暗黒を如何せん。

と、自分の修養の足らないことを悔いている。

二十一日夜今井忠治氏に送られて独影蕭然京を発したる彼は三十日の正午満腹の不平を殺して佐伯に入りぬ。

と、ある。大都会の真ん中から全く未知な淋しい九州の片田舎に来たのである。若い身空の独歩はどれ位不平不満であったろう。

佐伯の事未だ語り易からず。小生は何処までも神の愛を信ずるが故に、何処までも忍耐する積りなれども、自由を奪はるゝ事其の度を過ぎなば蹶然として去らん。と、どこまでも辛抱して職務に励む考えであるが、もし、自由を奪われる度が過ぎたらきっぱりと職を辞して去る考えであると、覚悟の程を示している。そして最後に

友あり、遠方にあれども弟あり。傍に在り、之れせめてもの慰みなり。

と、ある。弟収二を連れて来ているからよい慰めになる。と報らせてある。

この手紙を読むと佐伯に来た日の独歩の不平不満と不安な心持を推察することが出来る。（つづく）

会員の出版紹介

ふるさとの思い出　写真集　明治 大正 昭和　佐伯

軸丸勇編

A4判変型・上製・函入・一二八頁

収録写真　二五〇葉・　定価四八〇〇円

軸丸氏はこの写真を集めるために、三年間佐伯・南郡を西に東にくまなく駆け巡った。

古い写真があると聞けば、どこにでもいとわず車を走らせた。そして写真に収めた。軸丸氏の写真技術はプロ級である。中にはピッタリとくっついたガラスの原板を根気強く、何時間もかけてはいだ写真もある。

収集の中間に催した「思い出のふるさとの写真展」を見に来た人々の中には「私の家にも古い写真があります」と協力を申し出て下さった人もたくさんあった。

こうした篤志者の協力があればこそ、数百枚という懐かしい、貴重な古い写真を集めることができたのである。

この写真集はこうした篤志者の協力と、軸丸氏の並々ならぬ努力によって生まれ出たものである。

説明も間違いのないように、丹念に参考文献を調べ、人々に聞いてまわって苦心して書き上げられた。

軸丸氏のひたすらな努力がなければ、この珍らしい、貴重な写真は、永遠に多くの人々の目にふれることなくいつの間にか消え失せたことであろう。

明治・大正・昭和の懐かしいふるさとの写真集を、一家に一冊、子孫に伝えたいものである。（塩月）